

Toni Morrison の *Home* でたどる アフリカ系アメリカ人の旅

三井 美穂

African-American Journey in Toni Morrison's *Home*

Miho MITSUI

要 旨

トニ・モリスンの『ホーム』(*Home* 2012) に描かれたフランク・マニーの旅の諸相を、歴史的観点から論じる。フランクが妹のシーを救出し、故郷に「ホーム」を築くまでの旅で描かれる地名やルートは、一見鉄道路線の関係で立ち寄っただけの、意味のない選択に見えるが、実はモリスンはその地名を使うことによって、複数の伏線を準備しながらアフリカ系アメリカ人の歴史を示唆している。1950年代を舞台にした『ホーム』の背景には「忘れられた戦争」と呼ばれる朝鮮戦争や、アフリカ系アメリカ人を実験台とした医学的研究がエピソードのひとつとして取り上げられているが、本稿ではそれ以外にも「官製」の歴史に記載されなかった事柄や、現在徐々に明らかにされつつある事実が作品の中に示唆されていると考え、小説で描かれた地名に関連させながら、アフリカ系アメリカ人にとっての旅の意味を明らかにしていく。その際、二人の語り手を登場させたメタフィクションの構造も、歴史への示唆を理解するための重要な鍵となる。

キーワード: トニ・モリスン, アフリカ系アメリカ人, 旅, メタフィクション, 朝鮮戦争

はじめに

アメリカ合衆国は植民地時代から西へ向かう動きで始まった。イギリスからの植民の動きは大西洋を渡り、北米大陸の東海岸にたどり着いた。東海岸にできた町は徐々に西へと開拓を進め、やがて西海岸へたどり着き、1890年にはフロンティアの消滅が宣言された。19世紀半ばのゴールドラッシュや大陸横断鉄道、ホームステッド法は西漸運動の動力源であり、フロンティア消滅に向かった時代の象徴でもある。西への動きは、アメリカ人のフロンティア精神を形成し、その精神はアメリカ人の国民的アイデンティティとなったと言えよう。アメリカは常にフロンティアを必要としている。それは、その後太平洋の島々に進出し、冷戦時代にはさらに太平洋を越えて朝鮮半島やベトナムと

いったアジアにまでたどり着いたことから理解できる。

地理的なフロンティア以外にも、多くの分野でアメリカは開拓者だった。そのひとつが医学である。支配権の拡張のためには犠牲が伴ったが、医学の分野でも同様である。アフリカ系アメリカ人や精神病患者、囚人を対象とした人体実験の事実が、米NBCの“Ugly past of U.S. human experiments uncovered”などのメディアで次々と報道されている。NBCによると、その動きも海外へ向かい、1940年代にグアテマラで行われた梅毒実験が21世紀になってようやく明かされたという。

トニ・モリスン (Toni Morrison) は『ホーム』(Home 2012) で、この過去の地理的なフロンティアと医学的なフロンティアを、朝鮮戦争とJ. マリオン・シムズを彷彿とさせる人体実験として、並列させて読者に提示している。この西への動きに合流したのが、『ホーム』の語り手であるフランク・マニー (Frank Money) だが、フランクが西で何を発見したのかが、この作品の核として描かれていると本論では考える。

一方、このような開拓の動きに乗っていないアフリカ系アメリカ人は、異なる動きを見せていた。アフリカ系アメリカ人の移動は、奴隷船で強制的にアフリカからアメリカ東海岸に運ばれてからは、ほぼ南部の地域内で売買に伴う移動を強制されたか、あるいは囲い込まれ移動を封じられたかだった。やがて逃亡奴隷のルートは、自由をつかむ可能性を求めてあらゆる方向へ向かったが、奴隷制のない自由州を北部と呼んだことから、主に北へと向かうのが基本的なルートだった。しかし逃亡奴隷法の施行により、国内で「捕獲」された逃亡奴隷はその所有者に所有権が認められたため、北部では奴隷制度廃止論者が活躍し、逃亡奴隷を支援した。また20世紀はじめの「アフリカ系アメリカ人の大移動」(Great Migration) も、逃亡奴隷のルートに似通っており、「約束の地」北部へ向かった。

ヨーロッパ系アメリカ人が開拓精神を発揮して新しい土地を求めたのとは対照的に、アフリカ系アメリカ人は、受け入れてもらえる土地を探した。さらに時代が下ると、ディアスポラを経験した人々にとっては、ルーツを探すことも旅の主な目的になった。1970年代に小説家アレックス・ヘイリーは『ルーツ』でアフリカに自身のルーツをたどったが、モリスンは『ホーム』でアメリカの中にそのルーツを求めようとしている。それは奴隷制度のあった南部をアフリカ系アメリカ人の原点と見ることであり、厳しい選択であることは間違いない。しかしモリスンは『ホーム』でフランクに南部の故郷を再び見せている。

『ホーム』では、朝鮮戦争から帰還したフランク・マニーの旅が描かれる。モリスンは一度もフランクの肌の色には触れていないが、アフリカ系アメリカ人であることは明らかである。フランクは南部ジョージア州ロータスから朝鮮半島へ向かい、シアトルに帰還した後、ポートランド、シカゴを経由し、ジョージア州アトランタで人体実験の犠

牲になり生死の境をさまよう妹シーを救出し、最終的にまた故郷ロータスへ戻る。このルートは過去のアフリカ系アメリカ人の旅を逆行するものとなる。しかしながらそこには南北戦争前に逃亡奴隷を支援した組織「地下鉄道」のイメージもみられる。

「地下鉄道」の組織は、逃亡の道案内をする人たちを車掌、休息の場所を駅と呼び、鉄道を思わせる暗号を使って秘密裏に活動した。フランクは徒歩ではなく本物の列車で旅をするのだが、シアトルとポートランドの黒人教会のネットワークに支援され、シカゴ行きの列車ではウェイターに、またシカゴではダイナーで知り合った男性ビリーに助けられる。このような人々は地下鉄道の車掌、教会やビリーの家は駅になぞらえられる。

『ホーム』の地下鉄道を思わせる人々は、歴史的な逃亡ルートとは逆にフランクが南部へ戻る旅を支援するのだが、そこにはどのような意味があるのだろうか。本稿では、歴史的地理的移動をふまえ、トニ・モリスンの『ホーム』に描かれたフランク・マニーの旅のルートと、その旅がアフリカ系アメリカ人にとって何を意味するかについて考察したい。約束の地としての夢の北部、西へ向かったアメリカの伝統的なルートをたどった朝鮮半島、忌まわしい記憶しかないにもかかわらず「ホーム」と認めた南部、という3つの地域に焦点を当て、フランクにとって、ひいてはアフリカ系アメリカ人にとってその場所がどのような意味を持つのかを明らかにしていきたい。

モリスンは2012年 Bollen とのインタビューで『ホーム』の時代を1950年代に設定した理由を、“I was generally interested in taking the fluff and the veil and the flowers away from the '50s” (Melville House 127) と答えている。アメリカ人が古き良き時代として郷愁を覚えるこの時代から表面的なものをすべてはぎ取り、本当の姿を見せたかったという。戦争ではなく“police action”と呼ばれた朝鮮戦争、マッカーシズム、リンチや暴動によるアフリカ系アメリカ人の死、LSD や梅毒の実験など、モリスンはこの時代の暗部をいくつも挙げています。

またこのインタビューでモリスンは編集者としての経験も語っている。たとえばテキサス州の学校で使う教科書を編集するときは、“slavery”という言葉は使えないため“trade”などの言葉に置き換えなければならない、そうやって歴史は書き換えられている、とも言っている。モリスンはこれまでも、隠されてきた歴史、公けにされなかった事件を小説に描いてきた。『ホーム』もその延長線上にある。ただしモリスンは実際の事件を直接作品に書き込むことはない。どの作品でも、綿密に計算し、ヒントだけをちらつかせる。『ホーム』ではそのヒントは地名にあたることを考え、本稿ではその土地にまつわる事件に照射することによって、記憶を刻む媒体としての旅を論じる。

フランクのトラウマに焦点を当てフロイトの精神分析論をよりどころとした評論はWyattをはじめ多くみられるが、場所についての先行研究はいまのところ多くない。Sundman はフランクの旅のルートについて、シアトル、シカゴ、アトランタ等の地名

は出てくるものの、フランクがそこで過ごした時間も短く描写も少ないため、場所が前面に出てきて意味を持つのはロータスだけだという (Sundman 117)。しかしロータスは架空の地名であり、どこでもない場所とは逆にどこにでもありうる場所と考えられるが、実在の地名は、その場所特有の何かに意味があるからこそ、作家が舞台として選ぶはずである。Sundman は文学的な描写に特化して論じ、歴史的な出来事を看過しているため、本稿ではこれらの場所の重要性を明らかにしたい。また Beavers は場所と環境がアフリカ系アメリカ人にどのような影響を及ぼすかに焦点を当て、南部を「ホーム」とすることの意味を論じている。ポストコロニアルの視点でアメリカ人を眺めた Song Namgung の批評については、本稿の「朝鮮半島」のセクションで論じる際に援用する。また医療の歴史をたどったものとして、アフリカ系アメリカ人が実験台となった事件に焦点を当てた Fitz Gerald の評論は、実験の犠牲になったシーを論じる際のよりどころとし、ここではそれを含めた歴史とフランクの旅とを二重写しにしながら論じていく。またこの旅と歴史は、小説の構成ともかかわってくる。作品自体も二重構造になっており、テーマとなる旅と歴史を複眼的に捉える必要が生じる。そのため、まずは作品の構造を見ていきたい。

1. メタフィクションとしての『ホーム』

『ホーム』は2人の語り手によって語られるフランク・マニーの物語である。朝鮮戦争から帰還し、妹シーを故郷に連れ帰ったあとでフランクが語る、斜字体で書かれた短い章と、その話を聞く「作家」がフランクの旅の物語を描く長い章とが、ほぼ交互に並べられている。フランクの語りはあまりにも分量が少なく、時代背景や社会状況については何も言及していない。フランクの社会事情に対する無関心あるいは沈黙は、モリスンの言う「国民的記憶喪失」(“The Pain of Being Black” 2) を示唆しているように見える。現代人は、奴隷制度を含めアメリカの歴史を忘れてしまっているため、その失われた記憶を再び取り戻せるように創作を行っている、とモリソンはエッセイに書いている。

フランクがほとんど語らないため、読者は「作家」が再構築した物語を頼りに、フランクの人物像や経験を理解しようとする。読者は作家が描く社会や時代背景を信頼して読むのが自然である。ところが、読者は作品を読み進める中でしばしば違和感を抱く。

たとえば、シカゴへ移動する途中の駅のホームで起こった事件の見方が、フランクと「作家」では異なる。アフリカ系アメリカ人の男がホームに降りて何かを買おうとしたところ、店員や客たちが男を蹴り倒し、転がった男の尻を踏みつけた。夫を助けに駆けつけた妻は顔に石を投げられる。2人が列車に駆け込んだあとも、ホームの群衆は列車

が発車するまでわめき続け、列車の窓に生卵を投げつける。車内で鼻血を出しすすり泣く女性を見たフランクの感想として、「作家」は “He will beat her when they get home, thought Frank” (*Home* 26 以下引用は *H* と記載) と書いているのに対し、のちにフランクはそれを否定して “Not true. I didn't think any such thing. What I thought was that he was proud of her but didn't want to show how proud he was to the other men on the train. I don't think you know much about love. Or me” (*H* 69) と反論する。

奇妙なことに、「作家」が語る章では、フランクがこの暴力事件そのものや、群衆が迫ってくる様子をどう思ったかについて、何も触れられていない。それどころか、実際に事件が起きたときフランクは寝ており、事件の発端を見逃した、と書いている。これは先に述べた「国民的記憶喪失」をフランクが体現しているとも考えられるが、人種問題が引き起こした事件に対するフランクの心情に、「作家」が思い至らなかったためとも考えられる。事件については書いても、その事件がアフリカ系アメリカ人をどのような心理状態に追い込むかについては、素通りしている。また事件の概要を列車のウェイターから聞いたとき、フランクは、車掌に知らせたのか、と尋ね、ウェイターに「馬鹿か」と言われる。アフリカ系アメリカ人が暴徒に襲われたと白人の車掌に通報しても意味がないことに、南部出身のフランクが気づかないはずがない。さらにその話を中断して、フランクはウェイターにシカゴのレストランと宿の情報を尋ねる。このような会話が暴徒を目撃した直後に冷静に続けられるかは、はなはだ疑問である。

読者が感じる最も大きな違和感は、危篤の妹シーを救出するための旅にもかかわらず、フランクがずいぶんのんびりとしているところだ。冒頭の病院を抜け出す場面では、フランクは雪の中をはだして走り、夜明け前に教会の牧師を叩き起こすが、旅の後半に列車が故障で立ち往生したときは、焦りを見せることなく雑貨店に飲み物を買に行く。アトランタについては、タクシーがないからといって、夜の街をぶらついてバーに入る。急がないとシーが死んでしまう、という手紙を受け取って出発したフランクの旅の緊急性と、「作家」が描くフランクの行動は、印象が大きく異なっている。「作家」はフランクの物語を書きながらも、フランクの心情を理解しきれていないように思われる。この作品における違和感の正体はそこにあると思われるが、この点を指摘して「作家」の正体を論じた先行研究はいまのところ見当たらない。

このように見ると、「作家」はフランクとはまったく異なる環境にいる人物であろうと想像できる。たとえば、逃亡奴隷マーガレット・ガーナーの子殺しの新聞記事をもとに創作した *Beloved* では、語り手のモリスンは、ガーナーをモデルにして創作した人物セサの心情に寄り添いながら描いている。そのため読者は、人間性を失った残酷な子殺しとしてセサを非難するのではなく、奴隷制度の犠牲者としての母親セサに共感する。

しかし『ホーム』の「作家」は登場人物を理解していないため、読者に違和感を抱かせる。これはつまり Beavers が指摘するように、『ホーム』はメタフィクションとして解釈できるということだ⁽¹⁾。「作家」はモリスンではない。そうすると、モリスンはなぜ共感できない「作家」を使ってメタフィクションを書いたのかが次の疑問となる。Beavers はこの点を人種問題として捉えておらず、「作家」はモリスン自身で、創作には事実とは異なる誤った解釈がありうる、という危険性を表しているのだと論じる (Beavers 212)。だが『ホーム』のメタフィクションは、人種問題が鍵となっていると思われる。

“Site of Memory” や “Unspeakable Things Unspoken” などのエッセイで、モリスンはアフリカ系アメリカ人を描く白人の視点を論じてきた。登場人物がアフリカ系アメリカ人であっても、白人作家の見方で白人の読者に向けて書く、“white gaze” を問題にしてきた。そのためこれまでの作品はすべて “white gaze” を取り除き、アフリカ系アメリカ人の視点から、登場人物に寄り添いながら書かれている。しかし『ホーム』では実験的な取り組みをしているのではないか。つまりモリスンは、白人の「作家」にアフリカ系アメリカ人の物語を語らせているのではないかと考えられる。

モリスンは *Paradise* や *Lecitatif* では登場人物の人種を明確にしておらず、それによって読者が先入観や偏見によって登場人物の人種を限定することをあえて邪魔している、あるいは読者の先入観をあぶりだそうとしているかのようである。『ホーム』でもモリスンは読者に挑戦しているようだが、その手段は登場人物ではなく、正体不明の語り手である。『ホーム』はモリスンが書いたアフリカ系アメリカ人の物語であるから当然モリスンが語っているはずだ、と思いつく読者の意表を突いている。しかしその意図は、アフリカ系アメリカ人作家の文学が文壇の表舞台に登場する 20 世紀までの文学のキャンオンを、メタフィクションの形式をもって示し、揶揄することにあつたとも考えられる。

では『ホーム』の「作家」はどんな人物と仮定できるだろうか。少なくともリベラルな立場で 1950 年代から盛り上がりを見せた公民権運動のような動きに共感した人物ではあろうが、アフリカ系アメリカ人の心情や文化を理解しきれていない。たとえば『アンクル・トムの小屋』を書いたストウ夫人を念頭に置くと、『ホーム』の「作家」の立ち位置が理解しやすい。奴隷廃止論者だったストウ夫人の功績は大きいですが、現在「アンクル・トム」がアフリカ系アメリカ人に蔑称として使われていることを考えると、なお理解しやすい。あるいは大恐慌後の公共事業促進局 (WPA) によって支援された作家が元奴隷に行ったインタビュー (slave narratives) に、『ホーム』の設定はより近いといえる。フランクは「作家」のインタビューに答えているだけで、自分から望んで話しているわけではない。それは冒頭のフランクの語りでも明らかだ。幼いころ死体遺棄の現場を目撃したが、その恐ろしい光景はそのとき見た馬の記憶に隠され、最近まで思

い出せなかった、と話す際に、次のように言う。

Since you're set on telling my story, whatever you think and whatever you write down, know this: I really forgot about the burial. I only remembered the horses. They were so beautiful. So brutal. And they stood like men. (H 5)

「作家」がフランクの物語を創作・脚色するであろうことを、フランクは承知のうでインタビューに答えていることがわかる。

「作家」は各地の描写や歴史的背景については語っていない。それはアフリカ系アメリカ人の歴史や社会について、理解が十分ではないからだろう。ではなぜ白人の「作家」を使って作品を二重構造にしなければならないのか。それは「作家」が語る物語を官製の歴史に見立てるためだろう。作中作をコントロールするモリスンは、この「作家」の旅の描写の章に、アフリカ系アメリカ人にとって重大な事件を忍び込ませる。メタフィクションを利用して、モリスンは読者に（から）歴史的な旅の記憶を書き込もう（引き出そう）としていると思われる。白人作家中心の文学のキャンオンを表すようにも見える『ホーム』のメタフィクション（官製の歴史）は、旅が示唆する隠されたアメリカの歴史を描くにはふさわしい形式と言えるのではないだろうか。本稿では、この「作家」の記述を中心に、フランクの旅を追いながら、「作家」が描いていない場所の記憶に、モリスンが言わんとしていることを読み取る作業をする。

2. 南部の暴力

フランク・マニーの最初の旅は、まだ4歳のころのことだった。大恐慌後、テキサス州バンデラ郡にある黒人コミュニティごと白人に立ち退きを強要され、一家は祖父のいるジョージアへ向かった。この移動はそれより約100年前に、チェロキー族がジョージア州からオクラホマ州のインディアン居留地まで強制移動をさせられた「涙の道」を彷彿とさせる旅であり、またその逆を行く道りである。チェロキー族は数少ない馬車と1人1枚の毛布といくばくかの支援金をあてがわれ、決められた期限内にオクラホマの不毛の土地に到着しなければならなかった。フランクたちには馬車も車もなく、ほぼ手ぶらの状態で出発した。24時間以内に立ち退かないと殺すと脅されたからだ。立ち退きを拒否した老人が目をくり抜かれ惨殺されたと聞き、みな慌てて逃げた。車を所有している家庭は少なく、ピストン輸送をしてくれる隣人もいたが、それでも徒歩の旅が大半を占めた。民主主義を標榜する排他的な社会は、インディアンに続いて、自らが運び込んだアフリカ系アメリカ人を追い出した。この時代の土地を追われる旅と言うと、ス

タインベックの『怒りの葡萄』が比較の対象になるだろうが、『怒りの葡萄』では、ジョード一家は果樹園で仕事を得るためにカリフォルニアへ向かった。ルート 66 を西へ向かう、自由への道だった。西へ向かう旅が成功を約束するとは必ずしも言えないが、『ホーム』のフランクたちは、成功の夢もない、より深い南部へと後戻りするのである。

たどり着いたジョージア州ロータスの貧しい黒人コミュニティでは、血のつながらない祖母に虐待され、“*Nothing to do but mindless work in fields you didn't own, couldn't own, and wouldn't own if you had any other choice*” (H 83-84) といった、希望のない土地でフランクは少年時代を過ごす。しかし“*Lotus, Georgia, is the worst place in the world, worse than any battlefield*” (H 83) としか思えなかったこの地が、物語のエンディングではフランクが自己のルーツとして定めた「ホーム」となる。このロータスは架空の地名であることから、アフリカ系アメリカ人にとっては、それぞれがたどることのできるアメリカ南部の地を思い描けるように舞台設定されていると考えられる。ロータスでフランクに起こったことは、アメリカのいずれの土地でも起こりえたこととして、モリスンは描いている。

冒頭でフランクは、10歳のころロータスのすぐ外で目撃した男の死体遺棄の場면을語り、その謎はエンディングで「作家」によって明かされる。瀕死の状態だった妹シーが回復し、2人で新たな生活を始めようとしたとき、フランクは祖父セイレムに、死体遺棄の場所だった種馬場の話を聞きに行く。その場所はその後闘犬場ならぬ、人間同士が闘わされる賭博場となっていた。そこではかつて、アラバマから連れてこられたジェロームという男とその父親が、白人観衆の前で、ナイフを持たされどちらかが死ぬまで闘わされたという。父親は「こんなのは命じゃない」(H 139) から自分を殺して生き延びると息子に言うのだが、これは南部で連綿と続く、アフリカ系アメリカ人に植え付けられた感情だろう。父親はジェロームに「やれ」と言い、ジェロームは拒み続けたが、最終的に息子は父親を殺した。泣きながらロータスに来たジェロームをコミュニティの人たちは手当てし、カンパし、ラバを与えて逃がした。殺人ゲームに興じた白人たちが隠したのがその父親の遺体だったことが、10年以上前に目撃した場面の真相だったとようやく判明する。

1975年の映画 *Mandingo* に、奴隷主が奴隷同士を闘わせるシーンがある。これはのちに“Mandingo Fighting”と呼ばれ、より残酷に死を伴うゲームに変換されて描かれるようになった。南北戦争前には、主に奴隷主の娯楽(“de white folks' joyment”)のために奴隷同士の拳闘が行われていた、と元奴隷の John Finnely は“Federal Writers' Project”のインタビューの中で証言している(“Federal Writers' Project” 42)。こん棒や銃は禁止されていたが、そのほかは何をしてもいいというルールで、奴隷たちもこのイベントの開催を楽しみにしていたという。拳闘が過激になりすぎたときは、奴

隷主が止めた。奴隷主の間で行われる賭けによってもうけを出すことも目的とされたため、奴隷という所有財産を失うわけにはいかなかったからだ。しかし南部再建期後のジム・クロー法の時代だったらどうだろうか。殺人ゲームではないが、ラルフ・エリソンは『見えない人間』で、バトルロイヤルを描いている。そこでは奨学金を勝ち取るために、目隠しをされた黒人少年たちが白人スポンサーたちの前で、ボクシングのような殴り合いをさせられる。

『ホーム』で描かれた、殺人ゲームが賭博場になるような歴史的事実は現在まで明らかにされていないが、ジム・クロー法の時代に起こった類似した事件はいくつも思い出すことが可能である。その意味で、『ホーム』のこのゲームの場所を南部の架空の場所に置いたのは、この類の事件はどこでも起こりえたと示すうえで重要と言える。公民権が獲得されるまで、リンチ事件は各地で止むことがなかったからである。2015年に *The New York Times* をはじめとした各メディアは、人権団体 Equal Justice Initiative が行った調査結果を報道した。調査によれば、1877年から1950年までの間に4千人近いアフリカ系アメリカ人が南部でリンチによって殺害されたという。さらにEJIの創始者 Bryan Stevenson によると、リンチのうち20%は数百人から数千人の白人観衆を前にして行われた「公開行事」であり、観衆はピクニックをしながらその模様を眺めたという。このような光景も『ホーム』に描かれた殺人ゲームのシーンに見え隠れする。

フランク・マニーの名前もリンチを示唆する。「作家」は「マニー」について、困窮や貧困のエピソードしか語っていないが、モリソンは「作家」の語りの裏に、実は1955年にエメット・ティル少年が南部ミシシッピ州でリンチを受け惨殺された事件を忍ばせる。シカゴ出身の14歳になったばかりのティル少年が食料品店で白人女性に口笛を吹いて「誘った」として、店主たちがティル少年を惨殺した事件である。この店がミシシッピ州マニーという地にある。ティル少年の遺体の顔は、判別できないほどに攻撃を加えられていたが、これはまた『ホーム』でテキサスからの立ち退きを拒んで目をくり抜かれて殺された老人に加えられた暴力と同じである。だが当時このようなリンチを実行した者が刑罰の対象になることはなかった。加害者の罪がどのように裁かれるべきか、あるいは贖罪の可能性があるのかについては、フランクの朝鮮人少女殺しのエピソードであらためて問われるため、「朝鮮半島」のセクション以降で論じる。

3. 北部の「分離すれど平等」

19世紀末の、人種によって「分離」された車両をめぐるプレッシー対ファーガソン裁判で、連邦最高裁判所は車両の区別が“separate but equal”すなわち合憲であるとの判決を下した。南部のジム・クロー法を連邦裁判所が認める形となった。しかし

1954年のブラウン対教育委員会裁判では、人種によって通う学校を区別する「分離すれど平等」は違憲であると認められた。この判決の年が『ホーム』の時代背景となるが、実際には北部でも、ジム・クロウ法によってアフリカ系アメリカ人の権利は制限されていた。シアトルのロック牧師は、バスストップのカウンターには座れないだろうからと、フランクにサンドイッチを持たせてくれる。ポートランドのメイナード牧師は、フランクが宿泊を拒否されない宿の情報を「グリーン・ブック」からメモしてくれる。フランクはバスでは後部座席に座り（“dutifully sat in the last seat” H 19）、ポートランドからは黒人車両に乗り込む。ジム・クロウ法が守り切れなかった「分離」を慣習で維持する様子が、北部に行くフランクの旅でも描かれる。

「作家」が語る物語のオープニング（第2章）では、フランクはPTSDの発作で騒動を起こしたらしく、警察に捕まりシアトルの精神病院で拘束されている。モルフィネで熟睡したふりをして監視員が手かせを緩めることを期待し、明け方の4時に逃げ出す計画を立てる。所持品も十分な服もないまま、雪の中へ裸足で飛び出す。裸足で歩きまわるとは、ジム・クロウ法の時代にも危険なことだった。浮浪罪（vagrancy）で逮捕されるからだ。1972年まで続いたこの法律は、もともとは南部再建期後、解放された黒人が仕事を探しまわるのを取り締まり、奴隷に後戻りさせるような法律だった。これが1950年代半ばの、リベラルなはずの西海岸北部にいるフランクを脅かすことになる。逃亡奴隷法と同じ目的を持つ法律が、時間と地理的空間を越えて、アフリカ系アメリカ人の自由な動きを奪っている。病院から裸足で逃走することはまた、逃亡奴隷のスタート地点を示唆することになろう。なぜならこのあとフランクは、シアトルとポートランドの黒人教会のネットワークで援助され、シカゴ行きの列車に乗せてもらうからだ。このネットワークを使って援助したのはフランクが初めてではない（“you not the first by a long shot” H 18）とシアトルのロック牧師は言う。2人の牧師に加えて、列車のウェイターとシカゴで世話になったビリーは、地下鉄道の活動家になぞらえられる。こうしてフランクは南部の鏡像としての北部を抜け出す。

一般的にジム・クロウ法は南部の法律と思われるが、北部でも有効だった。フランクはシカゴで警官に怪しまれ、身体検査をされる。シカゴで世話になったビリーの息子は、玩具の銃を持って遊んでいたところ、白人警官に撃たれ、いまでも片腕が麻痺したままである。しかし人種による「分離」や不平等は、日常的な嫌悪感のみならず、大規模な暴動へと発展する危険性をはらんでいた。差別的な待遇に対する抗議運動は、1919年の「赤い夏」と呼ばれる全米規模の人種暴動に膨れ上がった。その中でもシカゴの暴動は最も激しい部類に入る。たとえば、ミシガン湖の遊泳場に設けられた人種の境界線を越えて泳いだ少年が投石により溺死した事件は、最大規模の暴動を引き起こした。約50人が殺害され、500人が負傷した。

このように、シカゴの人種差別的な暴挙は、ジム・クロー法が規定したカラー・ラインが破られたとたんに起こった。たとえば、アフリカ系アメリカ人の大移動によりシカゴのゲットーが飽和状態になると、その一部が白人コミュニティに流れ込んだのだが、そのような家は放火や爆弾の対象となった。その中には1951年、白人居住区 Ciero に越してきたアフリカ系アメリカ人が、警官の脅しにも屈せず退去しなかったところ、4千人の暴徒が押し寄せて住まいを破壊した事件がある。『ホーム』ではこのような暴挙に抵抗を示したアフリカ系アメリカ人の登場人物は、テキサスからの立ち退きを拒んで惨殺された老人以外には描かれない。2人の牧師、ビリー、リリーなど、北部のアフリカ系アメリカ人の登場人物は、皆カラー・ラインを守って平穏な生活をしているように見える。暴動が頻発した時代背景は、「作家」の物語の中では看過されており、それが『ホーム』の特徴となっている。

居住区の問題は、シカゴからシアトルに場所を移して、リリーのエピソードに現れる。フランクと出会う前、リリーが閑静な住宅街に家を購入しようとしたとき、不動産エージェントに、人種による規制 (Racial Restrictive Covenants) があることを告げられる。結局リリーはシアトル中心部のセントラル・ディストリクトにアパートを見つけるのだが、実際ここだけがマイノリティに許されたゲットーだった。この規制は1948年には法的強制力は失っていたが、業界ではまだ、人種が入り混じる地域では不動産の価値が下がるとして、慣例的に差別が行われていた。最高裁でそれが違法だと判断されたのは1968年のことである。

リリーを通して描かれる当時の社会は、次に赤狩りとして現れる。1950年代、下院非米活動委員会 (HUAC) 主導で行われた赤狩りは、映画界をターゲットにし、庶民にわかりやすく赤狩りの厳しさを知らしめた。『ホーム』ではリリーが働いていた劇場で *The Morrison Case* の上演が阻止される。共産主義をテーマとした *The Morrison Case* は東欧のユダヤ系劇作家アルバート・モルツによる作品だが、モルツは議会での証言を拒否して投獄された、ハリウッド・テンの1人だった。『ホーム』のシアトルの小さな劇場でも、この作品を上演しようとした監督が逮捕され、劇場は閉鎖され、リリーは仕事を失う。もちろん「作家」は「赤狩り」という言葉は使っていないし、リリーは共産主義と劇場閉鎖を関連付けて考えてもいない。ただ静かに次の仕事に就くだけである。

社会的な不平等の是正を要求する共産主義は人種による不平等とも闘ったため、アフリカ系アメリカ人とのかかわりは大きい。公民権運動を支援した白人たちも「赤」として暴力やリンチの対象となった。肉体的あるいは精神的な暴力は北部にもあることを、モリスンは「作家」の描写の裏で糸を引き示している。これを解決するには劇場や映画館で平等のプロパガンダをする共産主義か、あるいは劇場の外に出て暴動を起こすしか

ない。しかしフランクもリリーも、不平等と闘う気配を見せない。

フランクやリリーの態度の対極に置かれるのが暴動だが、暴動はフランクを挑発するかのようズート・スーツの男の姿で忍び寄る。1度目はシカゴ行きの列車で夫婦が襲われた事件の直後、フランクの隣の席に無言で座り、座った痕跡も残さず消えていった。2度目はシカゴのビリーの家で、警官に撃たれて腕が麻痺した子どもと話をしたあと、ズート・スーツの男のシルエットが現れ、フランクはひどく怯える。3度目は故郷のロータスで「殺人ゲーム」の被害者を埋葬しなおすときだが、このときはフランクではなく妹のシーが見ている。いずれの場合も、人種問題が引き起こした暴力事件のエピソードの直後に、ズート・スーツの男が登場する。暴力で対抗せよ、とひそかに主張しているかのような現れ方だが、一方でフランクを無言で脅しているようにも見える。ズート・スーツはアフリカ系アメリカ人のダンディズムとして1940年代にハーレム等のゲットーで流行したオーバーサイズのスーツだが、無視されることを拒否し目立つファッションによって存在をアピールするアイテムだった。このファッションはメキシコ系の若者の間でも流行になったが、1943年ロサンゼルス兵士とメキシコ系のズート・スターとの対立が激化し、“zoot suits riot”に発展した。暴動を制圧するために、警察がメキシコ系アメリカ人ばかりを逮捕したことが論争となった一方で、ズート・スーツの暴力的なイメージも定着した。フランクが暴力の象徴であるズート・スーツの男に付きまわられているように感じるのは、朝鮮半島での少女殺しが大きく影響していると思われる。ズート・スターが対抗したのは人種差別主義者の暴力に対してだった。つまりフランクも、ズート・スターに攻撃される側の人間になってしまったことを認識しているからこそ、その姿に怯えているのではないだろうか。少女殺しによってフランクが知ったことが、『ホーム』でフランクがたどり着く終着点と考えられる。その事件がどんな真実をフランクに見せ、トラウマを引き起こしたのかを次に論じる。

4. 朝鮮半島への西漸運動

故郷のロータスはアフリカ系アメリカ人の貧しいコミュニティだったが、テキサスを追われて来た身にとっては、安心して眠れる場所があるだけで満足しなければならない。

Having been run out of one town, any other that offered safety and the peace of sleeping through the night and not waking up with a rifle in your face was more than enough. (H 84)

ティル少年が夜中に銃を突きつけられベッドから引きずり出されたように、「顔に銃を

突きつけられて目が覚める」ことさえなければ、平穏な生活といえた。だが所有できるものも、目標も何もない、冒頭でフランクが回想したような、いわば囲われた種馬場の美しく勇壮な牡馬の状態だった。息が詰まる町で、未来のない生活になかば敵意を感じ、フランクは幼馴染の2人と町を出る手段として、朝鮮戦争を選ぶ。朝鮮戦争はアメリカではじめて人種統合の部隊が採用された戦争だった。フランクはここで「アメリカ人」として西に向かうことになる。

フランクが西の地で知ったこととは何だろうか。結局のところ、アメリカ軍という柵の内側でその意味も知らずに勇壮にふるまうのは、種馬場の牡馬と同じだった。フランクは、戦闘に身を置くことで「生きている」気がし、そこには目的があると思っていた。それは反戦の主張もせず、幼馴染や戦友を殺したアジア人に憎悪を募らせたことからわかる。つまりフランクは、アメリカがかつてインディアンを退治しながら西に向かったのと同様に、朝鮮半島まで進攻してアジア人を殺すことに疑問を持たなかったのである。当初フランクはそれに気づかなかった。

Battle is scary, yea, but it's alive. Orders, gut-quickenning, covering buddies, killing — clear, no deep thinking needed. Waiting is the hard part. (H 93)

このことは Fitz Gerald が指摘するように、任務に忠実な者 (“someone sworn to selfless service, respect, and honor” Fitz Gerald 152) は「他者」に致命的な傷を負わず可能性があることを表す。正しいか否かを考える必要はない。これはまた、シーを実験台にして研究をした Dr. ボー (シムズ) が、医学に貢献するためにシー (奴隷の女性たち) の生殖機能を奪ったことと同じである。フランクは軍隊でアメリカ人となり、アメリカを背負って立つことによってアジア人を殺した。これが朝鮮半島でフランクが知った1つめの真実だった。

だが戦闘中ではなく、何もすることがない見張り番のときに、フランクはさらに醜悪な真実に気づくことになる。兵士が出たごみの中から食糧になるものを漁りに来る朝鮮人少女を撃ち殺してしまったときである。少女の手だけが柵の隙間から地面を這い、ゴミを漁る。子どものころにシーと2人で落ちた桃を拾って食べていたことを思い出し、少女を追い返すことはしなかったとフランクは言うが、一方でその少女はフランクにとって対等な人間ではなかったこともわかる。

Each time she came it was as welcome as watching a bird feed her young or a hen scratching, scratching dirt for the worm she knew for sure was buried there. (H 94-95)

少女は毎日ゴミを漁りに来た。鉄やガラス以外なら何でも食料となった。兵士の非常食や、国の家族が送ってくれたブラウニーのかけらや腐りかけのオレンジは、物があふれる「アメリカ人」にとってはゴミだが、少女にとってはごちそうだった。それを微笑んで見つめるフランクは、テキサスを追われたときに食べるものに苦労したアフリカ系アメリカ人ではなくなっている。

ところがある日少女は“Yum-yum”と言いながら、笑顔でフランクの股間に手を伸ばしてきた。性的な誘惑に負けたフランクは、ついにその少女を撃ち殺してしまう。フランクはこの少女殺しについて、すぐには正直に告白することができず、別の兵士が殺した場面を見た、と嘘をつく。しかし、Dr. ボーの実験により失ってしまった、いつか迎えることのできたはずの赤ん坊の姿を、あらゆる事象の中に見出し弔うシーの姿を見て、フランクは自分こそがこの少女の死に責任があることに気づき、告白を決意する。そして撃ち殺した理由を次のように語る。

I didn't think. I didn't have to.

Better she should die.

How could I let her live after she took me down to a place I didn't know was in me?

How could I like myself, even be myself if I surrendered to that place where I unzip my fly and let her taste me right then and there?

And again the next day and the next as long as she came scavenging.

What type of man is that? (H 134)

自分の中にある性欲ばかりか、そのはげ口に幼い少女を利用し、その責任を死という形で少女に押し付ける。アメリカ人としての気高さを守ることは、敵であるアジア人少女の命よりも大事だったのだ。アメリカ人として遂行すべき任務に従い考えることをやめたとき、自分を苦しめてきたアメリカを、フランクは自分の中に見た。そしてまた、考えずに抹殺することも、アフリカ系アメリカ人が失望しつつ耐えた、南部白人の暴挙と同じだった。フランクは南部を朝鮮半島にもたらしたのである。

Namgung はサイドのオリエンタリズムをフランクに見る。

His experiences intertwine him with aspects of gender, race, and Orientalist nationalism. In Korea, his status as a U.S. soldier transforms him into a part of national power. He demonstrates his new-found superiority of nationality and gender by invoking them against the Korean girl who is marginalized by

her nationality, sexual objectification, and ultimately murder. (Namgung 262)

オリエンタリズムとは言い換えれば、モリスンの言う “white gaze” である。自己の優越性は「他者」を作ることで確立するという点で一致する。フランクは戦争の目的も知らず、ただカラー・ラインのない軍隊の中で、生きる実感を求めて朝鮮半島に向かい、逃げ惑うアジア人を殺し、性欲のはげ口として利用した少女を殺した。テキサスからの立ち退きを拒んだ老人を殺した男と、自分の行為に何の違いもないことに気づくことほど、フランクにとって恐ろしいことはなかった。

フランクは、アジア人が、自分の体を盾にして子どもたちの命を守る様子を見てきた。ところが逆に、娘を売る大人もいると、フランクはアジア人を非難した。アメリカ兵に少女をあてがい、その見返りに、生きていくうえで必要な食料を得ようとするからだ。しかしその非難の矛先は結局、自分自身に向かう。フランクと少女の間の生命と性の支配権は、奴隷所有者と奴隷の関係と同じに見えてくる。アメリカを振り返ってみれば、奴隷制度は国家的な人身売買だった。先祖を苦しめたそのシステムの加害者側に立ってしまったことに、フランクはアジアで気づいた。この認識が、フランクを苦しめた2つめの発見だった。

フランクはアフリカ系アメリカ人の歴史のスタート地点である南部での祖先の体験を、西に向かった到着地点でアジア人に対して繰り返した。そのため、加害者の立場を返上すべく、再び南部に戻り、アフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティを取り戻す必要があった。アメリカ人の旅は西へ向かい、その地を征服して定住するが、アフリカ系アメリカ人の旅は、南部に戻らなければならぬことが理解できる。

Beaversはこの朝鮮人の少女の死は「誰が人間としてカウントされるか」という問題であるとするが、一方フランクがロータスで墓を作って弔うのは、「殺人ゲーム」の被害者と、戦死した2人の友人であると論じており (Beavers 224)、フランクが殺したことを問題にしていない。しかしながら『ホーム』で問題になるのは、「誰が人間としてカウントされるか」に加え、「誰に他者を征服する権利が与えられているか」、そしてその「誰か」は赦されるのか、であろう。この点については、本論の最後にあらためて論じる。

5. 南部に偏在する空白の場所

2021年にカナダのインディアン寄宿学校の跡地から200人以上の子どもの遺体が発見されたニュースが報道された。Reutersによると、このような寄宿学校での子どもの死は4千人以上に上るといふ。アメリカでも同様の事件が徐々にけにされており、コ

ルソン・ホワイトヘッドも少年の矯正施設で行われていたマイノリティの虐待を『ニッケル・ボーイズ』で小説化している。そのような事件と並んで、マイノリティを実験台にした研究が20世紀半ば過ぎまで数多く行われた。“Ugly past of U.S. human experiments uncovered”として特集したNBCによる記事には、1930年代から1970年代の人体実験がリストアップされている。アフリカ系アメリカ人や精神病患者、囚人を中心に実験が行われたという。その中でもアラバマ州タスキーギの梅毒実験は、1972年に内部告発されるまで40年続いた。

「婦人科の父」とも言われるJ. マリオン・シムズがアラバマ州モンゴメリーで奴隷の女性たちに非倫理的な実験を行ったのは1840年代のことだが、2017年にようやくけにされた。この事実の発覚はBLM運動と相まって、シムズの銅像の撤去を要求する動きに発展した。ニューヨークにあった銅像は撤去されたが、モンゴメリーには現在も銅像が建っている。だがその銅像の1マイル先には現在「婦人科の母たち」と題するMichelle Browderの作品がみられる。シムズの実験台になったことが明らかになっている3人の女性、Anarcha, Betsey, Lucyの像は、名前も知られていないそのほかの犠牲者の象徴でもある。ブラウダーはインタビューの中で、「誰もこの女性たちのことを話さないし、この女性たちが払った犠牲も、この女性たちが被った実験についても話さない。だがいま、このナラティブを、アートを使って書き換える時期が来たと思う」と答えている(“Michelle Browder, Mothers of Gynecology”)。Anarchaの像の胴体には実験の痕を物語る空洞があり、30回以上も同じ手術を繰り返された残酷さを示す。取り出された子宮にはガラスや針、はさみなど、実験に使われた道具が置かれている。捨てられた体というイメージから、材料はすべて廃材を利用したという。これは官製の歴史が讃えるシムズ像に対して、新たに提示されたもうひとつの視点、もうひとつのナラティブと言えよう。

このように、官製の歴史を別の角度から見直すことは、歴史家の仕事であると同時に芸術家の仕事でもあろう。モリスンもシムズを思わせる医師Dr. ボーを『ホーム』に登場させているが、モリスンが描くのは、実験の詳細や成果ではなく、シーの体である。シーの体は隠された歴史の証拠でもある。実験台になった女性たちの体に、ブラウダーは大きな穴を開け、手術道具をそこに並べた。シーは、二度と妊娠することがなくなってしまった体の空洞を、目に映るものすべてに見えてくる“toothless smile babies have”という言葉で表す(H 132)。これが南部における空白であり、この空白にスポットライトを当てることで、別のナラティブの存在が明らかとなる。

『ホーム』のシーの物語の中心は、どのような経緯でDr. ボーのクリニックにたどり着いたか、実験台になった傷をどのように癒していくかの過程であり、Dr. ボーの実験そのものについては描かれていない。Fitz Geraldが指摘するように、ロータスの女た

ちに介抱され回復することは、アフリカ系アメリカ人の生殖機能に対する人種差別主義的なロジックを崩すことになる (Fitz Gerald 151)。教育を受けていない女性たちがそれぞれ持ちよった、先祖から受け継いだ民間療法で、西洋医学が壊したものを癒すのである。ポリオで体が自由に動かない者や工場の事故で片目がみえなくなった者もいたが、医者にかかる権利を持たずとも、力強く生き、他者を癒す。この女性たちは、子宮を破壊されたシーの肉体の回復のみならず、精神的な傷を乗り越えるすべを教える。フランクはインタビューを受けて「作家」に語っているが、シーは誰にも聞かれていないのに自分に起こったことを女性たちに語る。“Cee described to them the little she knew about what had happened to her. None of them had asked” (H 121)。しかしその内容は描かれていない。語ったという事実のみが重要である。それはブラウダーの像の胴体にくり抜かれた空洞と同じで、シーの子宮にいない赤ん坊と、空白の語りが、アフリカ系アメリカ人の視点で捉えた歴史のナラティブであると言える。白人「作家」がシーの語りを空白にしたまま物語を紡ぐのは、アフリカ系アメリカ人の空白の語りをより一層際立たせる。さらにはその空白の語りを南部に置くことによって、15世紀にジェームズタウン植民地で始まったアフリカ系アメリカ人の歴史を、読者に記憶させることになる。

おわりに

子どものころに目撃した男の死の真相を知ったとき、フランクはシーを伴って種馬場で骨を掘り起こし、その骨をシーが作ったキルトに包み、丁寧に埋葬する。この作業は息子を守って死んだ男、ひいては南部で奴隷制度やジム・クロウ法を生き延びた祖先に敬意を表するためばかりではない。シーが二度と身ごもれない赤ん坊、そして朝鮮人少女を同時に弔う儀式でもある。この儀式は官製の歴史に刻まれなかった無名の人たち、登場人物としても名前がつけられていないこれらの人たちを、モリスンが準備した『ホーム』すなわちアメリカ人の母国の歴史に刻む作業であろう。しかしそれによって、誰が歴史に刻まれるべきか、誰の命がカウントされるべきかはわかるが、命を奪った者は赦されるのだろうか。この儀式はフランクの少女殺しの贖罪とも受け取れるが、フランクは赦されるのか。

ロータスに帰郷したフランクは、これまで気づかなかった故郷の美しさを知る。幼いころの記憶と異なり、質素で堅実だけれども、希望にあふれた場所として描かれる。すべてを焼き尽くすような太陽、舗装されていない、歩道もない道路、そのかわりに野菜を害虫から守るために計算して作られた花壇、木の深い緑、女たちの歌声、男たちの楽器のメロディ、料理の匂い、そしてシーを回復させた女たちの力といった、生命の躍動を感じさせる描写が続く。子どものころはなるべくさぼってクビになるように仕向けた、

単調で実りのない仕事だったはずの綿摘みも、ピンクの花の美しさに気づき、先祖の心を想像することができた。

Like all hard labor, picking cotton broke the body but freed the mind for dreams of vengeance, images of illegal pleasure — even ambitious schemes of escape. (H 118-119)

しかし、「復讐の夢」があり、「違法な喜びの空想」「大胆な逃亡計画」があり、心を自由にできるから奴隷が辛い綿摘みの仕事に耐えられる、と考えるのはいったい誰だろう。赦しが欲しいのは、逆にフランクに自分を見た「作家」なのかもしれない。フランクは被害者だった自分が朝鮮半島で「アメリカ人」として加害者の立場に立ったことにショックを受けたが、そのフランクのインタビューを聞くことで、リベラルな「作家」も実は自分が非難してきた「アメリカ人」のひとりだということに気づく。その結果、「作家」は過去の罪を払拭すべく南部を新しい景色に書き換えているように思われる。モリスンのメタフィクションは、ここにたどり着くために用意されたのかもしれない。

『ビラヴィド』は奴隷船に乗った6千万の人々に捧げられたアフリカ系アメリカ人の記念碑だったが、『ホーム』はアメリカ人のために残された記録のようにもみえる。南部のジェームズタウン植民地から始まった建国の歴史、ひいては奴隷制度の始まりを見据え、南部をアメリカ人の「ホーム」とすることによって、アメリカ人の記憶に歴史を刻み付けると同時に、許しを求めるアメリカ人もその歴史に書き込んでいるといえよう。

《注》

- (1) メタフィクションに関しては、2022年8月21日の新英米文学会全国大会シンポジウムで口頭発表した内容に詳しいが、今後別の論文として発表する予定である。

引用・参考文献

- 荒このみ『西への衝動——アメリカ風景文化論』1996年NTT出版
巽孝之『アメリカ文学——駆動する物語の時空間』2003年慶応義塾大学出版会
松本昇、中垣恒太郎、馬場聡編著『アメリカン・ロードの物語学』2003年金星堂
Beavers, Herman. *Geography and the Political Imaginary in the Novels of Toni Morrison, Geocriticism and Spatial Literary Studies*, Gewerbestrasse: Palgrave Macmillan, 2018.
Fitz Gerald, James. “Loving Mean: Racialized Medicine and the Rise of Postwar Eugenics in Toni Morrison’s *Home*,” *MELUS*, 46.3 (2021), pp. 140-158.
Kennedy, Rosanne. “Racialized Intimacies and Alternative Kinship Relations: Toni Morrison’s *Home*,” *Toni Morrison on Mothers and Motherhood*, eds by Lee Baxter, and Martha Satz, Bradford: Demeter Press, 2017, pp. 158-180.
Library of Congress. “Image 40 of Federal Writers’ Project: Slave Narrative Project, Vol. 16,

- Texas, Part 2, Easter-King.”
<https://www.loc.gov/resource/mesn.162/?sp=40&st=text&r=-0.044,0.008,1.082,1.24,0>
- Melville House Publishing, ed, *Toni Morrison: The Last Interview and Other Conversations*, New York: Melville House P, 2020.
- Montgomery, Maxine. “Bearing Witness to Forgotten Wounds: Toni Morrison’s *Home* and the Spectral Presence,” *South Carolina Review*, 47.2 (Spring 2015), pp. 14–24.
- Morrison, Toni. *Home*. New York: Knopf, 2012.
- _____. “The Site of Memory,” *Inventing the Truth: The Art and Craft of Memoir*, ed. by William Zinnser, Boston: Houghton Mifflin, 1987, pp. 101–124.
- _____. “Unspeaking Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature,” *The Source of Self-Regard: Selected Essays, Speeches, and Meditations*, New York: Knopf, 2019, pp. 161–197.
- _____, and Bonnie Angelo. “Toni Morrison: The Pain of Being Black,” *TIME*, Monday, May 22, 1989.
<https://content.time.com/time/subscriber/article/0,33009,957724,00.html>
- Namgung, Song. “Unburying the Orientalist Gaze of an African-American Soldier in *Home*,” *ANQ: A Quarterly Journal of Short Articles, Notes, and Reviews*, 34: 3 (2021), pp. 262–266.
- NBC. “Ugly past of U.S. human experiments uncovered” Feb. 28, 2011,
<https://www.nbcnews.com/health/health-news/ugly-past-u-s-human-experiments-uncovered-flna1c9465329>
- New York Times, the. “History of Lynchings in the South Documents Nearly 4,000 Names.”
<https://www.nytimes.com/2015/02/10/us/history-of-lynchings-in-the-south-documents-nearly-4000-names.html>
- Reuters. “Remains of 215 children found at former indigenous school site in Canada”
<https://www.reuters.com/world/americas/remains-215-children-found-former-indigenous-school-site-canada-2021-05-28/>
- Rothstein, Richard. *The Color of Law: A Forgotten History of How Our Government Segregated America*, New York: Liveright P, 2017.
- Sampson-Choma, Tosha K. “Brother-Mother and Othermothers: Healing the Body of Physical, Psychological, and Emotional Trauma in Toni Morrison’s *Home*,” *Toni Morrison on Mothers and Motherhood*, eds by Lee Baxter, and Martha Satz, Bradford: Demeter Press, 2017, pp. 253–269.
- Silva, Catherine. “Racial Restrictive Covenants History: Enforcing Neighborhood Segregation in Seattle.”
https://depts.washington.edu/civilr/covenants_report.htm
- Smarthistory. “Michelle Browder, Mothers of Gynecology.”
<https://www.youtube.com/watch?v=bTHX4yW2fbU>
- Sundman, Alice. *Toni Morrison and the Writing of Place*, Routledge, New York: Routledge, 2022.
- Wyatt, Jean. *Love and Narrative Form in Toni Morrison’s Later Novels*, Athens: U of Georgia P, 2017.